生活人間学の構想

溝　上　泰　子

前　言

「日本家政学」が誕生して十数年になる。1961年（昭・36）の学会発表の内容に対して，外から厳しい批判が出て来た。それは「家政学」独自の対象領域がないというのである。即ち，「家政学」の名に於て研究されているものは，物理学，化学，医学，薬学，経済学，心理学，教育学，法学，農学等の諸科学の領域に吸収されるからである。ただ研究対象が家庭生活のなかにあり，それに関係しているという点に於てのみ，「家政学」といっているにすぎないというのである。この批判はまことに正しい。何故ならば，凡ての科学の自立性は，その対象の自立性と，これに対する一定の見方，態度を要求する。そして，一定の対象を一定の見地からながめることによって，これを規定する一定の学的方法が定まるからである。むろん，科学には原理，原則の確立を主目的とする基礎科学，純粋科学と原理，原則を応用して，人間生活を合理化し，より合目的たらしめようとする応用科学，実用科学とがある。一般に，基礎科学の対象，研究方法は明確に設定しうるし，それ故にこそ純粋科学でありうる。しかし，応用科学の対象は明確でない。従って一つの原理，原則，一定の方法で体系化することは困難である。例えば，農学の対象は農業という複雑な生産活動である。これをより合理的，より合目的にするためには，あらゆる科学知識を必要とする。これと同じことが「家政学」についてもいい得る。それは家庭生活現象を対象にし，それをより合理的，合目的的にするための研究であるからである。しかも，家庭生活は尽し難く複雑，多岐なものである。これらの諸現象をただ家庭生活のなかにあるものとして，諸々の学問の原理と方法をかりて，理論化，体系化し，これらを「家政学」と呼んでいるところに，雑学と批判される所以がある。いうまでもなく，家庭生活がある限り，これを研究対象とする「家政学」は成立する。そのためには，雑多な対象を一貫した原理と態度によってながめ，処理し，体系化せねばならない。ポアンカレー（1854～1912）が[①]「家屋は石材からなる。同様に経験科学は事実からなる。石をいくら集めても家にならぬと同様に，事実をいくら集めても学問にはならない」といっている。これはまさに，今日の「家政学」批判に適言である。かくして，「家政学」が学として成立するためには，その実態をなすものを分析し，それを綜合する原理を立てなくてはならない。その原理は何んであろうか？端的に，それは「主体性の原理―家庭は主体形成の原初的場である―」であるべきである。何故ならば，人間は家庭のなかに生れ，そこを主体形成の基盤とするからである。家庭生活研究がこの原理によって整理され，貫ぬかれ，緊密に連繋し，関係しあうことによって，一つの応用科学が成立するであろう。しかし，それは「家政学」と呼ぶよりも「生活人間学」というべきであろう。このことを論述することが，本論文の意図である。

本　論

1．人類時代の家庭の位置

(1)　実在としての人類世界

「[②]人類の概念は18世紀に於てようやく哲学的理念として成立したものであるが，第一次世界大戦後，この地上に実在するようになったとみられる。」そして，第二次世界大戦後の今日，それは単なる抽象的概念として，哲学者のあた

まの中にあるものではなく，れっきとした実在物になっている。

ヨーロッパに於ける近代国家の発展は，ついに第一次世界大戦を引き起こした。戦争は地域的にこれまでにないひろがりをもち，長期化し，近代兵器がいちぢるしく進歩したことは，戦争の経済的意義を大きくし，その災禍は，一般の生活者に深刻な影響を及ぼした。ここに人道的立場から世界平和の主張者もあらわれてきた。しかし，第一次世界大戦当時には，人道的な社会正義や平和は，生活者と充分に結びつくことが出来ず，いわば個人の良心の問題にとどまった。

しかし，第二次世界大戦には，第一次世界大戦とは異った意味が加わった。それは第一次世界大戦と同じように，近代国家間の戦争であったが，ほかに，ファシズムに対する民主主義的な戦いであり，従属地域の諸民族の積極的な，強国に対する戦いであった。[3]「したがって，この戦争を通じて，世界の民衆の自覚は，階級的にも，民族的にも一層高まった。しかも，この戦争の段階に，兵器として用いられた原子力の威力は，人類がはじめて繁栄か破滅の岐路に立っていることを示したので，人々をして，戦争と平和の問題について，人類の歴史を新に徹底的に反省すべき機会に当面していると考えさせはじめている。」今日，生活者がそれぞれ自己を認識して，その特性を発揮し，互いに圧迫されることのない世界を実現するために協力しようとする意欲と行動は，この問題と密接に結びついている。例えば，原水爆禁止世界大会，軍縮のための世界婦人集会（1962.3月ウィーンで開催 日本から16人の代表出席）世界母親大会などに集まる人々は，個人としてではなく，人類の代表者としての資格をもつものである。又，1957年（昭・32）に，ソ連の発射した人工衛星は世界の生活者に宇宙を認識せしめ，引きつづく米ソの核実験，人工衛星船は，「宇宙支配」と共に「一つの人類世界」を自覚せしめる。かくて，第一次世界大戦当時には，一部の先覚者によってのみ叫ばれた平和への願いは，しだいに多数の人々にとっての重大な問題と意識され，平和を現実に維持しようという動きが高まっている。この事実は，一層，人類の実在性を確実にするものである。結論的にいえば，20世紀の中葉にいたるまで，まだ学問上の類概念にとどまり，人間が自己の生活に即して「われわれ」という同類共同意識を覚えうる範囲は，せいぜい国家または民族の限界を脱しえなかった。しかるにこの事態も，今ようやく変化しつつあるように見える。地球の急激な相対的縮小，人間と文化の頻繁な交流，植民的支配と人種的差別観の崩壊，そして何よりも核兵器戦の脅威と平和の熱望―これらの諸条件はわれわれに史上はじめて，人類という生物的種を，われわれ自身の属する単一の運命共同体として意識せしめずにはおかなくなった。「今やその存続が危殆に瀕している人間という生物的種の一員として訴える」というラッセル卿の呼びかけも，もはや不自然でなくなり，特定の国家や民族の立場に固執しながらこの危機を超克することは絶対に不可能になった。

(2) 国家・民族意識の変革

近代国家は「民族」と概念された国民のもので，民族的・国民的対立の機関であった。その対立は原始社会の対立に似た本能的なもので，その間の闘争の激化が自己破滅を示唆するに至った今日，その対立を清算しようとする意図が，国家自体の内に起った。かくて，国家・民族間の対立―強制の原理は協力・自由の原理へ変わりつつある。「国際連合」や「ＥＥＣ」（欧州共同市場―1958成立）はその表われである。殊にＥＥＣの強固な団結は，何よりも仏独両国が真に手を握り会えるはずがないという世界的先入観をくつがえした。それには，諸々の既成観念や固定化した民族的偏見や，国家的利己主義など測り知れない困難をのり越えなければならなかったろう。[4]「大戦で既存の諸秩序を破壊された自国の復興を，ヨーロッパの復興と結びつけた。自国の運命を，ヨーロッパの運命に結びつけなければ，自国もヨーロッパもともに復興しえない，と考えた。そこから，共同体のアイデアが生れたのだ。」論理の尺度を越えた独仏の対立が協力へ転換した事実こそ，この

世界史の時点に於て，世界が受けとらねばならない最大なものであろう。田辺元博士は種の概念の根拠について[15]「私が種を思惟しなければならなかった理由は，種が一方に於て私を脅す存在であるに拘らず，他方に於て，私の存在がそれに基底附けられ，私の生命の根源がそれに於て見出さるべき基体として，必要に応じ私の存在をそれに対し犠牲とすべきもの，従ってその意味に於ては，否定せらるべきは私の存在であり，種は飽くまで肯定せられるべき存在であるという意味を有することであった」と述べている。しかし，この論理は是正されるべきではあるまいか？何故ならば，国家でさえもが，個人を手段とする目的ではなくなるまでに世界史は進展したからである。世界の限界性が具体的になってきた今日，国家・民族はその存在のために個人の生命や世界を犠牲にすることは出来ない。ここに，今日，世界が否応なしに協力の原理の前に立たされている所以がある。地球上の人々が，風土，習俗，皮膚，言語等を通してもつ，実感としての一体感を越えて，世界共同体，協力の線に沿うて動いている理由がある。日々，盛んになる厳しい人間，文化の交流，史上いまだ見られなかった各国人による共同研究，共同作業等はそれを促進するであろう。かくして，第二次世界大戦後のわれわれには，世界共同，協力は肉体になってきた。このことによって，むしろ日本人としての国家意識は正しく形成されていくであろう。

(3)　閉塞的小世界としての家庭

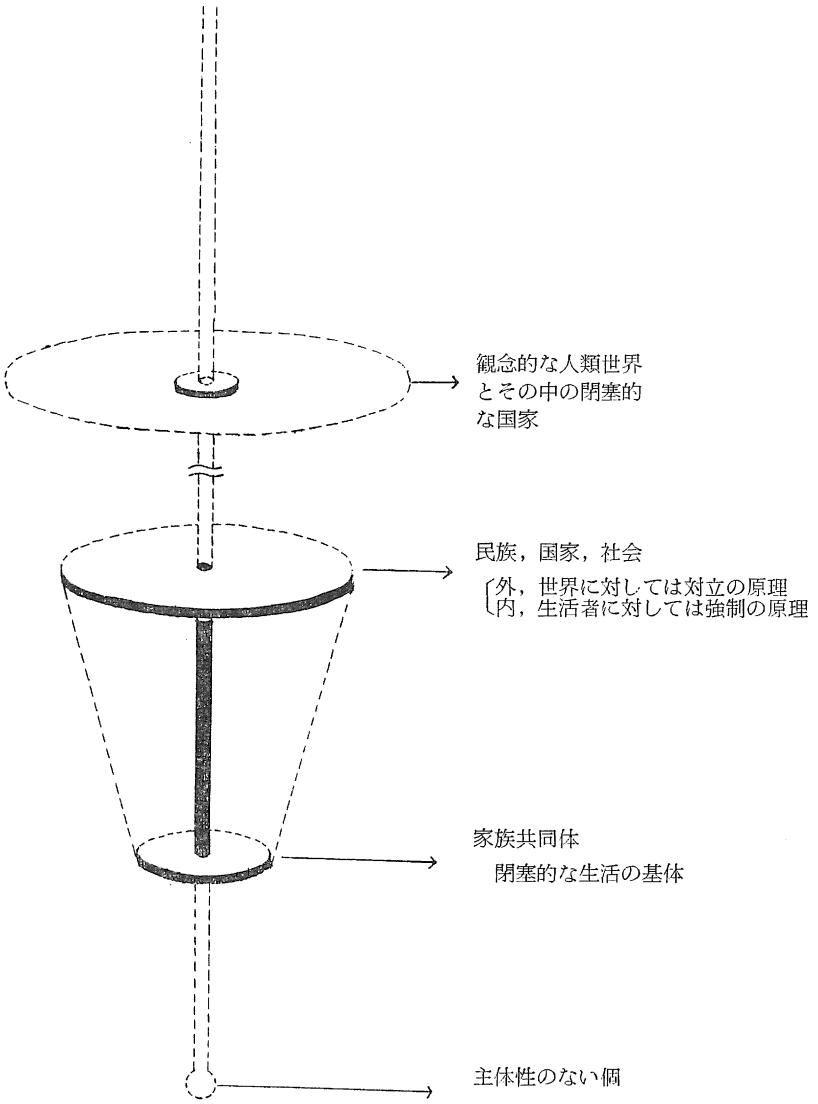
現代の社会形態の変革と共に構成単位である家族形態が変わりつつある。殊に第二次世界大戦後のわが国に於てみられるように「家族」（旧家族制度の家族形態）の崩壊は，封建社会の根底をゆるがすものである。かくして，個人の「家」からの解放が進みつつある。交通圏の拡大と共に，現代の人類移動は，「家」の崩壊による，個人の移動である。しかも，個人は家庭に生まれ，これを基盤として，主体性の形成に生きる。ここに，人類世界に於ける家庭の位置がある。

(a)　家族・家庭・主体

家族は家に限定された親族の日常的生活共同体である。テンニース（1859～1936）がいったように家族は“Das isolierte Haus”をもち，そこでは凡てのものが共有され，共同でなされる。もちろん，[16]「何物もこれを購うこともなく，すべてが家族に於て生産される」という自足的一多世代家族形態から近代小家庭への推移は，世界共通の家族の歴史である。古代及び中世的大家族に於ても，夫婦と幼少の子供からなる家族，いわゆる小家族＝核家族は存在したといわれる。このことは，家族に固有な機能をみるうえで，重要な点である。核家族をいくつか含む大家族は，その構成員は全体に属するが故に相互に結合し，個人相互が結合することによって，全体を成立せしめたものではない。そこでは「全」は「個」に優位していた。しかも，その結合紐帯は，自然的条件のみでなく，複雑な文化的，経済的条件に制約されていた。然るに[17]「自活している未婚の子供は家に執着すべきでない。家から出て，結婚し，自分の家を作るべきである。子供が結婚したら，その年老いた両親は，子供の家で生活すべきでない。父も母も元気でお互いに親しい場合はもちろん，一方が死んでしまっても，もうどう仕様もない場合は別であるが，子供の家で生活してはならない。」というように，アメリカの家庭は変わりつつある。これは今日の家族一般の変わりゆくすがたであろう。

大家族内の小家族は，同じ家のなかに分離した空間，即ち，異なる部屋をもつというだけではなく，大家族の部分をなしつつしかも，固有の機能を営むことによってのみ，核家族として大家族のなかに存在している。この見地からすれば，大家族から小家族への縮小は，大家族を生ぜしめた諸機能の複合から，家庭固有の諸機能が解放されてゆく過程であるということが出来る。[18]「家庭とは近代家族の生活の内面に形成されていく特定の人間関係とその物的条件である」といわれるが，家のなかでの父母と子の緊密な日常生活の共同は，一つの生きものであり，各々国有の表情をもち，本来，情緒的に

第1図　昭和20年（1945）以前の
庶民の生活構造関連図

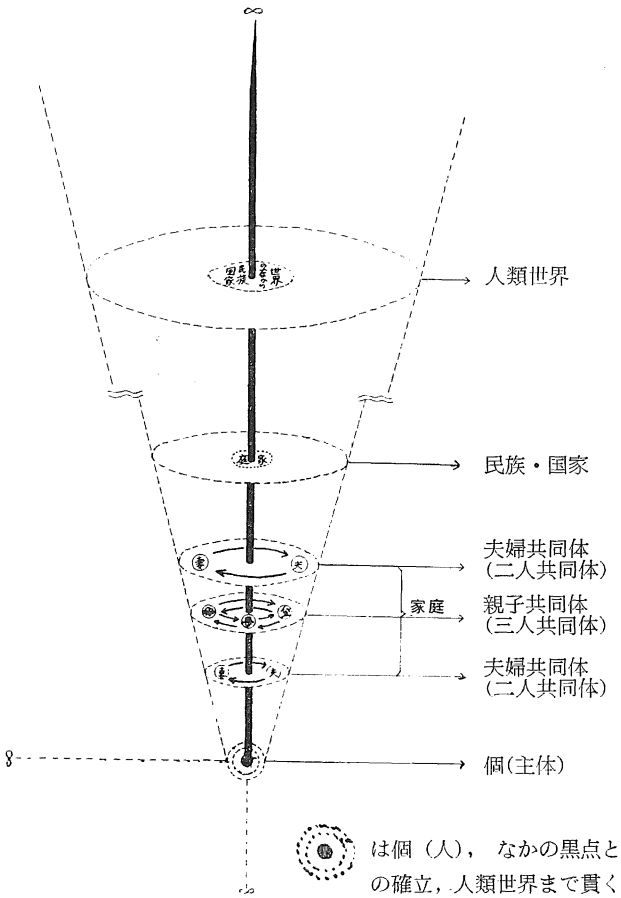


は自覚以前の個，無主体を示す。

はとじられた家族や国家を示す。

世界と国家・家族と空白な個がつながっていないのは，世界も個も真実在として，うけとれていないことを示す。国家と家族のなかの太い実線は生活空間が両者の中に限定されていることを示す。これまた真実在としての人間の在り方ではない。

第２図　昭和20年（1945）以後の庶民の
個・家族・世界の生活構造関連図



は個（人），なかの黒点とその延長は個の主体の確立，人類世界まで貫く。二重の点線は夫婦の関係における一人（個）を示す。

∞　は個，世界の無限性を示す。

最も安定した閉塞的な小世界である。しかし，次の時代の歴史を創る人間が生れ，育つ基盤として，世界史的意味をもつ。人類が実在化してくると共に，家庭の重さが加わってゆく。この意味に於て，第二次世界大戦後は「家庭の再発見」の時代であろう。かって共産主義社会では，家庭は消滅するといわれたが，[9]「ソヴェト社会では家庭と社会とは別のものではなく，家庭は社会の基本的単位であり，生命である」という建前から，今日，国策として家庭の生活環境の改善と婦人の地位の改善を計画している。しかし，人間は国からも家庭からも，更に世界からも束縛されてならない個（主体）の世界をもつべきである。

註　第１図は国家・社会と家族が閉鎖的につながっている時代（例えば〝日本帝国〟時代）の生活構造関連を示す。

第２図は現代（人類世界が実在して来た今）の生活構造図を示す。凡ての社会を貫く黒線は個の主体性を示す。

(b) 家庭の機能

家庭という小世界は窓をもつ一つの生命体であり，それは性と血の複合態である。近代家庭，それが人間のものである限り，これらは，最後までそこに残される根本的機能である。

性[10]　「人間を個人または階級としてとらえることに満足せず，人間を一組の男女として，あるいは家族として，とらえるという方法を定立する」といわれるほど，人間は生来的に性的な存在である。しかし，きわめて本能的，不限定的な人間の性行動は文化であって，自然ではない。これは主として婚姻関係に於ける男女の日常的共同生活によるものである。むろん，婚姻関係によらない男女の対偶があるし，性的欲求の充足は対偶以外の方法によってもなされるであろう。だが，婚姻に於ける性的対偶は必ず性以外の日常生活の共同を伴ない，婚姻を目的としない男女の共同生活のなかには，つねに性的欲求の充足可能性とこれに対する社会の承認がある。即ち，性的欲求充足の機能は，家庭成立の根本的な契機である。かくて，家庭に於て，不定限な性的要求が，終生的な継続で，日常化し，安定化しているところに，人間の性が文化である所以がある。

しかし，戦後，この性の在り方に変革のきざしが見える。「[11](一)性の肯定―恥から権利への転換　(二)性に於ける男女平等　(三)避妊技術の発達」から男女の「偕老同穴」的意識が検討されて来た。「[12]各々の配遇者は成長のための権利と手段を持つ。各人は自分の隠れていた才能を見つけ出すかもしれないし，その才能を伸ばすかもしれない。又，自分の神経症的傾向を払いのけ，新しい気分で人生を再出発するようになるかもしれない。女性が教育をうけるにつれて，結婚はある意味で危険をはらんで来た。……合衆国にはおよそ71,000,000人の教会員がいるが，その中の多くは，もはや結婚が終生続きうるものであるとは信じなくなっている」という。生理学的知識や医学的技術の進歩は生産＝妊娠，性に於ける消費＝享受とを分断した。この点に於ては，性は解放されてきている。今や，両性協力の原理に基いて，男女各々の可能なる人間性の発展がはかられない限り，離婚は正当化されていく。従って，終生の男女の結合には，男女は一対的存在であると同時に，「主体」の座がきびしく要求される。ここに，家事労働価値論のうまれる理由もあるのではあるまいか？これらの問題解決のためには，われわれの歴史的，社会的条件の変革がなされねばならない。殊に，「男は外，女は内」と夫婦の職分を区別するものは，単に家の壁を意味するものではないことが認識されると共に，男女の性関係を閉ざされたものであると同時に開かれたものへと，つくりかえる外的条件が要求される。

血　これは生殖による人間のつながりであり，親子関係である。人間の場合には，単に子を産みおとすのが生殖ではない。哺育，養育，教育の過程が生殖のそれであり，それが個体としての人間生産の過程である。しかし，生殖における親子関係の機能は，父と母とでは必ずしも同じではない。何故ならば，[13]「子が常に母胎から生まれ，母性が〝観察〟の事実であるのに対して，父性が単なる〝推定〟上の事柄であるからである。」今日に於ても，父には己れの子であるという客観的な証拠がない。父子関係を支えるものは，妻への信頼だけである。その可能性は夫婦の日常の主体的な存在の共同によるものである。人は「[14]母子関係の中に人間関係の最も純粋且つ緊密なものを見出し」従って，「父はいなくても子は育つ（これは女性の経済的独立が実現されつつある現代に於ては一層の妥当性をもつであろうが）」というが，生殖機能の遂行のため，更に教育機能の理想的な実現のためには父を必要とする。何故ならば，凡ての子供が学ばねばならない重要なものの一つは，如何にして，ある性の一員であるか，または同時に異性との完全な関係を保つか，ということである。殊に，生後3年ぐらいの間に刻印される人間関係は，子供の性格の基本的なものになる。[15]"Man is *not born human*. It is only slowy and laboriously, in fruitful contact, cooperation, and conflict with his fellows, that *he attains the distinctive qualities of human nature*." かくして，幼児期に於て，親の

繰り返す行為や態度が，子の情緒的反応の方向を習慣づける。このことによって，子の中に条件反射的な反応の型がつくられる。それは同時に[16]「家庭の人たち，両親，祖父母，年上の同胞たちによって示される行動の型（behavior pattern）である。」しかも，それが人間性格の基本的なものになるだけに，成人の後にも変わり難い。むろん，子が親に対して，特殊な情緒的反応を取ることによって，親の性格を発展せしめる。このような家庭の教育機能は，人類時代を生きようとする現代人にとって，最も重要なものである。何故ならば，現代は「人間的なもの」を大切にすることを主体的に生きていく時代である。[17]「人間の生命，人間の価値，人間の創造力を何より大切にする」ことが，家庭，民族，国家，世界に通ずる主体の根本的態度である。これが，幼児期に家庭に於て方向づけられねばならないからである。

「福翁自伝」の中で，彼は幼少時に，母の乞食女の虱取りに加勢させられたことを述べている。[18]「今思出しても胸が悪いようです」といっているが，無条件に人間性を肯定する母との生活体験の中で，彼は人間が人間に対する根本的態度＝ヒューマニズムを，みずから感得したのであろう。又，この母は「死生の事は一切言うことなし。何処へでも出て行きなさい」と，長男死後，精神的一経済的限界状況の中から諭告のねがいをいれている。このことは母にとっては至難中の至難である。何故ならば，共同体のもっとも純粋な形態は母と子の関係にあり，この場合，統一が発展の最初の段階で，分離は後の段階であるからである。一般的に，共同体としての家庭に於ては，統一と分離の相互媒介によって，人間は主体的に生きることを学び，自らを家庭から解放し，このことによって，更に，高次の家庭をつくる。従って家庭の統一と分離の原理と社会的一経済的条件の相互媒介によって，家庭の在り方は変化する。両親がつねに最良の教育者といえないし，またいつも両親の手もとに子供を置くことがよいことでもない。この観点から，ソ連では子供の教育施設を完備することにつとめ，或る綜合寄宿学校では，児童4人に対して1人の教職員がいるという。将来，家庭の教育機能がいかなる形態であらわれようとも，人間関係の本質である統一と分離のかみあわせが，より高い人間性の発展であるように研究し，配慮されることこそ，20世紀後半の世界の国々の目標であろう。

労働力の再生産　この機能は現代の時点に於て重要な意味をもつ。それは，人間疎外が生活者の危機として自覚されてきた今日，明日のエネルギー恢復が家庭に於て，どのようになされるかという問題である。

ヘーゲル（1770～1831）は1807年「精神現象学論」の中で，主体が自らのはたらきによって作り出したものが，主体から独立し，主体に対立するものとなり，逆に主体を否定することを疎外（Entfremdung）といった。この哲学用語がマルクス（1818～1883）やテンニース（1859～1936）を通じて，今日，ますます社会一経済構造や人間性の深刻な問題になってきた。[19]「マルクスの商品生産の分析とテンニースのゲゼルシャフトの学説は人間と人間との分離を近代社会の基本的持質と認める点に於て類似している。」現代の人間疎外は諸種の型に分れるが，マルクスは労働の目標による人間疎外を，テンニースは共同体の分解によるそれを問題にした。後者はその著「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」（初版1887年）で，[20]「歴史的発達という観点からすれば，社会はゲマインシャフトが支配的であった時代から，ゲゼルシャフトが優勢を占める時代へ向って動いてきている。…この動きをわれわれの運命として受けいれ，これがわれわれに突きつけている挑戦を，まともに受けなければならない」といっている。今日，ゲマインシャフトの典型といわれる家庭さえもが，殊に母子関係（最も純粋な共同体）さえ，ゲゼルシャフトへの転化を見せている。近代技術の発展は生活一般，娯楽，食事でさえ，個人的なものにする傾向をもっている。[21]「人間が昔から必要としていた食物，住居，セックス，娯楽は，今や，きわめて能率的に家庭外で満される。にもかかわらず，今日ではこの国（アメリカ）がはじまって以来，かってないほど多く

の人々が結婚している」という現象は，わが国にもあてはまるであろう。これは疎外されている人間が，活路を家庭に求めていることを示すものではあるまいか？この際，科学技術の発達は家庭を洞窟的，閉塞的にするおそれがある。これが，今日の新な問題である。生活の前進に於て「ゲゼルシャフトの根底にある建設的なエネルギーが姿を現わし，そして終局的には社会の新しい段階,すなわち,ゲゼルシャフトとゲマインシャフトのより高い形態が展開され，両者が相互に結合されるような段階へ導いてゆくことが出来るであろう。」そのためには現代人は，毎日の日常生活の中で，どのような人間疎外を被っているかを知り，それらをもたらす社会―経済条件を変革する必要にせまられている。

経済的機能　親子関係が生殖の段階を超えて，扶養の段階に入るとき，そこにはすでに経済的行為がはじまり，それは消費の共同であり，共産の構造をもつ。純粋に性的な夫婦関係や単純に生理的にのみ基礎づけられた親子関係は，経済的な扶養の共同がそれに伴なわない場合には，極めて脆弱且つ不安定なものになる。殊に父子関係は父母による扶養の共同なくしては成立せず,かりに成立したとしても弱い。最も深いつながりをもつ母子関係でさえ，扶養の関係がつづくのは，子供が独立して自ら食を求めるまでである。従って，今日のように，子供の自立意識が高まり，女性の経済的独立が可能になり，社会保障制度が確立するなど，他方，これらをもたらす歴史的―社会的条件が進めば，消費の共同の内実である夫婦・親子関係の緊密性は，自らゆるやかになる。何故ならば，社会的―経済的条件が良好でない場合，親の子に対する扶養意識の中に，子に投資する意識がないとはいえないからである。又，子の親に対する愛情の中にも，「苦労して育ててくれた親」に対する切実な感情がある。それがかえって，親子の人間性を束縛するものになる。かくして，夫婦（性）親子（血）の複合態としての家庭が発展するためには，経済的条件が人間の基本的文化生活を営みうるものであることは，いうまでもない。従って，現代の経済機構が社会主義的な方向へ展開することは，歴史の必然である。この流れを阻止することは不可能である。むろん，この流れに正当性を与えるものは，夫婦・親子の，殊に前者（父母）は相互の人間性を認め合い，その開発を一日きざみにつくりあげてゆかねばならない。奈良県榛原町笠間という山間の「白い共産村」といわれる「心境部落」は，徹底した共同生産と共同消費によって，18ケ家族，80人余りの25年の生活史をもっている。天理教に謀叛をおこした異端者として，村八分になった4家族は，経済的限界状況の中から，家族単位の生活と正反対の共同社会をつくりあげている。それは純粋に「食う」ことを目標にした結合集団（ゲゼルシャフト）として発足した。にもかかわらず，25年の歴史をもち，家族数はふえ，一般農民に比して，高度の生活をもっている。この事実はどう解されるべきであろうか？テンニースのゲゼルシャフトに於ては，人と人との間の分離は非常に深い。そのために，人々は自分以外のすべての人々に対しては緊張状態にある。このような人間関係で発足した「心境部落」が（むろん家族単位で結合したという点で，一般に，いわれるそれとは異るが），4分の1世紀もつづいているところに，ゲマインシャフトの統一の原理がリードしていることを見のがせない。それは権利義務制度や経営採算のバランスシートでは割り切れないほど，本来，日本農村に国有の，小集団社会組織の原理とヒューマニズムに徹した指導者によって指導されている。われわれは，これを，ゲゼルシャフトとゲマインシャフトとのより高い結合の形態と見ることは出来ないであろうか？この意味で「心境部落」は日本農村にあらわれた，文明の実験といえるであろう。

オルダス・ハックスレーは「みごとな新世界」に於て，家庭を人間の胎生時代の遺物として，科学的に計画された未来の世界を描いている。子供は人工受精によって生れ，貧乏,病気,失業等あらゆる苦悩はなく，人間の向上もないが，悲哀もないユートピアを書いた。むろん，彼がこれを「みごと」と観ずるはずがなく，それは反語である。人間の想像を絶した空想の家

庭観であるが，われわれがこの作品に於て学ぶべきことは家庭は歴史と共に変わるということであろう。それは人間の主体性の形成の原初的な場であり，歴史的―社会的条件の変革と共に，無限に変るものである。このことを確認して，この論述の一歩を進めることにする。

2．生活人間学の構造

(1) 前　　言

人間と共に家の中の生活の歴史ははじまった。一人の例外もなくこの生活の営みはなされている。しかし，これほどその本質が科学の光に照されていないものはない。政治，経済，科学，歴史などの知識をもたなくても，人々は毎日の生活の営みを，適当に処理している。このことは，それがいまだ，人間の知的世界に存在していないことを意味する。むろん，家族に関する制度的変遷，その比較，家からの個人の解放等，又，単に生活に関する科学知識，技術の研究はなされている。しかし，生活それ自体を科学の対象とするものは考えられていない。時間的にいえば，24時間の最大量を示す時間の中の生活が，科学の眼の外にあることほど非科学的なことはない。

世界史の偉大な転回と共に，家庭生活の比重がくわわり，知的関心がふかまり，日常意識に於ける評価がたかまってきたことは見逃し難い事実である。これは日常生活が政治経済を離れてはありえないことを意味する。従って，生活の中にあって自分たちの暮しの真実の姿を探求すると共に，生活の外側，即ち，社会，国家，世界との連繋をもち，正確にそれをつきとめねばならない。人々はこのような生き方なくしては生活できない現実に立たされている。何故ならば「[29]政治が経済の集中的表現であると同時に，それらの中の諸矛盾は，生活の構造関連の中で，最後の場とされる家庭生活にしわ寄せされるからである。」以上の立場に於て考えられるものが「生活人間学」の構想である。従って，それは家庭という生活空間に於ける生活の変革を通して，人間革命を企図するものである。

(2) 生活構造関連の分析

―生活人間学の問題領野―

従来の「家政学」が雑学といわれ，数量的，合理主義の応用技術論といわれるのは，生活の経営者としての主体の問題が見落されているところに重要な理由がある。家庭とは，単に同じ血につながる者が共に生活しているというだけの場ではない。それは，何ものにも譲渡できない性（異性愛）と血（親子愛）を紐帯とした「直接生命の生産」(マルクス) の場であり，その成長過程における消費の世界である。それは生産と消費，物資と人間，主体と客体，男と女，親と子などが渾然として統一態をなしている社会の基本単位である。従って，家庭生活の科学化，合理化を目標とするとき，今日の人間生活の中の精神的，心理的，生物的欲求やその関係の体系並びに，男女の在り方を明らかにし，この商品生産社会における歪みや疎外を究明し，人間の主体性の形成に資するものでなくてはならない。

主体の問題　「[30]マルクスはヘーゲルと同じく，人類は疎外の苦しみとそれを克服するための闘争を通過することによって，自己自身のところへ帰るのだと確信を抱いていた。人間は自分のエネルギーを外の世界へ投げ出す。彼の生命は生産物にしみこんで客体化し，それをつくり出した力との間に割れ目を生ずる。しかし，その生産物は生命の外側にとどまらず，生命のなかにふたたび統合され，その割れ目はとざされる。」この生命の運動は，人間に固有なものであり，主体の創造活動である。従って，生活者が家庭生活をよりよく作る働きに於ても，この運動の図式は同じである。自分の家庭創造のイメージを家庭生活へ投入する。それは，その中の物や人に定着して，生活者に対立し，距離をもつ。この距離は，運動の過程に於て，自分の内部からではなく，外側から課せられるところの条件にしたがわせられる場合には，一層，痛切なものになる。たとえば，経済状態，材料の性質，使用される道具，複雑な人間の問題や突

然な不幸な事態などのために課せられるものがそれである。しかし，生活者が吹きこんだ生命によって生気をもつようになった家庭という作品やそれが醸成する雰囲気（家庭の表情）は，おそらくこのような運動から生れるのであろう。その瞬間には．生活者にとっては自分の生産物（人間形成）はもはや．自分から切り離されたものではなく，自分の生命のなかにとりもどされ，それを豊かにし，それを燃え立たせるものになっているのである。

形作るものは人間のひとりの性格である。「ひとりは結局，我の個体性を形作るために，周辺的な一切の束縛から自己自身を切断することに外ならない。」[29] このことは偉大なる芸術家，科学者の言葉や生活態度に於て容易に理解される。しかし，生活者が家庭の創造者である限り，ひとりの座にたたない限り，家庭作りは不可能である。むろん，ひとりは人との関係のただ中にありながら，しかも彼自身の内に深く住むことの出来るひとりである。温い家庭の雰囲気に囲まれながら，しかも尚，静かに己自身と語りうるひとりである。かくひとりに於て，実際に人は生活の内容を形成しているのである。従って，人をひとりの性格に於て把えることは．却って世界の中ではたらくものとして把えることである。しかも，家庭生活に於けるひとりの座につくものは，主として夫婦と父母であり，それは男か女の何れかである。しかし，男女共に，人間であるという感情を持つことが大事である。しかも，夫婦・父母が人間であるためには，かえって，両性の差異を認めることである。このことは，かえって，相補的な在り方に於ける家庭創造の座を確実なものにする。

客体としての家庭　建物としての家に限定された家庭生活は，相反する性質をもつ複合的統一態である。これを貫く「一つの原理」として，「主体形成の原理」を設定する。[30] マックス・シェラー（1874～1928 独逸の哲学者，倫理会学，宗教現象学や学，心理学，知識社人間学等に貢献する）は情緒生活を三つの層位に分ち，各層位にその構造上のまとまりを与え，しかも，それぞれは作用関連のなかにあるという。この階層説にならって，家庭生活態を縦の系列に於て4つの層位，即ち，物質的，生命的，心理的，精神的段階に分ち，横の系列に於て，男性的，女性的なものに分つ。しかも，各々は動的作用関連の中にあるものとして，一つの生命態である。従って，家庭生活を全体として，現代社会の変化の展望のうちにとらえることが，根本的な態度として要求される。然らば，この四つの階層は如何なる特質をもつのであろうか？

第一　物質的階層　すでに家庭生活のなかにとり入れられた物質は単なる物質，自然ではない。それは人間によって作られている。従って，性的色合さえもつものもある。しかし，これには量化的方法，実験的手続，技術的操作，つまり自然科学で発達した方法や手続が適用される。従来の「家政学」はこの層位の研究を主とするものである。

第二　生命的階層　家庭生活が性と血につながる人間の緊密な集団として，一つの生命体である限り，各々の家庭に固有な身体性をもつ。従って，ここでは，構成員の身体，これにつながる個人のもつ有機的感覚や原始感情，優生学などが問題になる。

第三　心理的階層　ここでは，家庭の意識，情緒的興奮，情欲衝動，本能，気分，熱情等が問題になる。

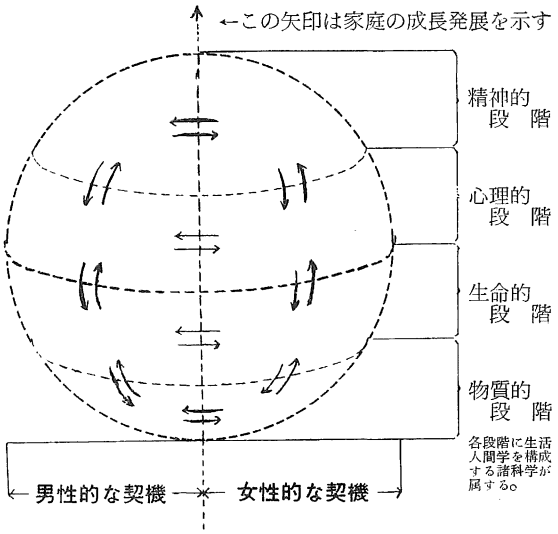
第四　精神的階層　ここに於ては家庭生活の根本理念，人倫性が問題の中心となり，絶えず，身体性，心理性にとらわれつつ，広く家庭生活と世界性とを結合し，家庭生活の変革を通して，人類世界の変革を企図する枢軸である。

更に，家庭生活態を男性的，女性的な二つの面に分つ。家庭内の人間が，男か女であり，それ以外にいない限り，家庭現象には性的な雰囲気，色合，情感などがある。

以上のような生活態としての家庭生活を，前進的に生かし，その中の一人，一人の主体性を形成し，子供に対しては，そこからの分離を助け，老人に対しては，人生完結への方向に喜びと安らぎを与えることが，生活人間学の目標である。

生活態の複合的関連を図示すれば，次の如し。

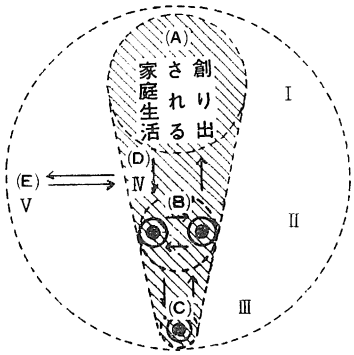
複合的関連態としての家庭生活



家庭生活と国家・社会・世界

家庭は人類世界や社会，国家の基本単位である。従って，国家の政治経済と直接につながる。已に述べたように，新しい人類時代に於ては，かって，人類を破壊した大分裂が，徐々に協力の方向へ移りつつある。「第一に，そこでは（傍点筆者）男女の社会的平等が確立されている。母性たることは女性の社会的職責とされている。第二，都会と田舎との分離も漸次，意をなくしつつある。農業が次第に工業化されつつあるからである。第三に，物質的労働と知的労働の相違も，完全な機械主義の採用によって克服されつつある。……そこには働くものが，社会労働全体に自分が如何に参与しているかをはっきり自覚することが必要である。」これは1949年，ジュネーブにおける各国の知識人による「国際討論会」の席での，アンリ・フェーブルの言葉である。この中で「そこでは」はソ連社会をさすものである。しかし，この歴史の推移はイデオロギーや政策の如何を超えて，世界史の進む方向である。従って，その方向に逆行するような政治や経済組織がおこなわれてはならないし，それは不可能なことである。むしろ，進んでこの方向へ社会や国家をつくる人間の根本的態度を，家庭でつくらねばならない。これが家庭の世界に於ける役割である。この意味に於て「生活人間学」は社会，国家，世界とのつながりに於て，研究を進め，動的な研究体系をつくり上げることを要求するものである。

次に「生活人間学」の問題領野の関連を図示することにする。



（Ⅰ）(A)は創り出される家庭生活
（Ⅱ）(B)は創る主なる主体としての夫（父）と妻（母）
（Ⅲ）(C)は創る作用の発動における「ひとり」の座，但し，この「ひとり」は夫婦としての関係的存在としての「ひとり」であるから，二重の点線でえがき，なかの黒点は主体性をあらわす。
（Ⅳ）(D)は(A)，(B)，(C)は一つであることを示す。斜線は(D)を一つとして明確にする。
（Ⅴ）Eは世界，国家等。
（Ⅵ）⇄は凡ては相互作用関連作用にあることを示す。

図に於てみられるように「人間生活学」の問題群は

（Ⅰ）(A)（創られる家庭生活）に関するもの
（Ⅱ）(B)（夫婦共同体）に関するもの
（Ⅲ）(C)に関するもの
（Ⅳ）(D)＝（ＡＢＣ）と(E)との関係に関するもの

上のような問題領野を「主体形成の原理」で統一することによって，学的体系化をはかろうとするものである。

◇結　　言

この論述のような考えは，10年前に，本論集に発表した。大体の思想の運びは同じであるが，その当時，人類世界を今日ほど，実在として受けとめられなかった筆者には，家庭生活の「人類世界に於ける位置」が，この論述に於けるほど明確，切実さをもっていなかった。更に，家庭を変化の概念でとらえようという自覚にも，今日ほどの強さがなかった。又，国家，社会や世界という家庭の外的条件が社会正義に基いて，変革されねばならないという要求も稀薄であった。これらのものが本論文に強くあらわれて来たのは，この10年間の筆者の生活探究，殊に庶民の暮しの究明と世界自体の変革の認識によるものである。そして，40年に近い家庭生活の中の矛盾と「女子教育」や「家政学」に対する不信と抵抗のなかで，自然につくられた考えが，「生活人間学」という形でまとめられることを要求してきたのである。むろん，本論稿が，全くの輪廓にとどまったことを遺憾とするものである。

— 1962.8.29 —

参　考　文　献

①ポアンカレー　科学と仮説
②務台理作　人間と倫理
③上原専禄編　日本国民の世界史
④茂木　政　朝日ジャーナル（1962.8.26）「新ヨーロッパの形成－統合への歴史的条件」
⑤田辺　元　種の論理の弁証法
⑥F, Tönnies,　Gemeinshaft und Gesellshaft
⑦Margaret Mead, Male and Female
⑧大熊信行　思想の科学（1961.12月号）「家庭像の創造」
⑨田中寿美子　世界（1961.12月号）「ソヴェトの家庭と婦人」
⑩大熊信行　思想の科学（前掲書）
⑪松下圭一　朝日ジャーナル（1962.4.8）「戦後婦人問題の盲点と焦点」
⑫Margaret Mead, 前掲書
⑬Maine, H. S.,　Eearly law and Custom
⑭F, Tönnies　Gemeinshaft und Gesellshaft
⑮Ernest W. Burgess Harvey Z. Locke　The Family
⑯正木　正　道徳教育の研究
⑰務台理作　現代ヒューマニズム
⑱福沢諭吉　福翁自伝
⑲パッペンハイム著 粟田賢三訳　近代人の疎外
⑳同前　同前
㉑Margaret Mead,　前掲書
㉒パッペンハイム著 粟田賢三訳　前掲書
㉓杉原良枝　心境部落
㉔森　喜一　生活
㉕パッペンハイム著 粟田賢三訳　前掲書
㉖務台理作　社会存在論
㉗Max Scheler,　Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik.
㉘ジュネーブ討論会報告　世界（1951.2月号）アンリ・ルフェーブル 笹本駿二訳